

大津市では、平成 28 年 (2016) 現在約 3,000 戸が農業を営んでいます。大津市の農家は専業農家が約 1 割で兼業農家が多いことが特徴です。

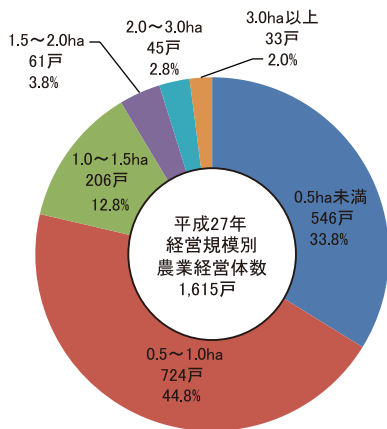
また、販売を行わない自給的農家の割合が高いことも特徴の一つとして挙げられます。

さらに、大津市内の 1 経営体あたりの経営耕地面積の規模でみると、1.0ha 以下が全体の約 8 割を占めています。

これらのことから大津市の農家は、経営の規模が小さいということが考えられます。

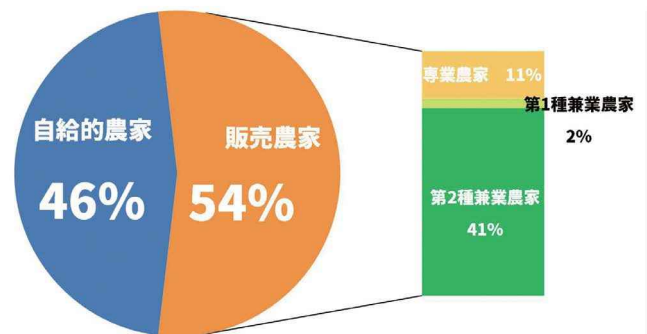
また近年は、生産者の高齢化が深刻化しており、農業人口は年々減少傾向にあります。

経営耕地面積規模別農業経営体数



出典：2015年農林業センサス

大津市内の農業者の構成



出典：2015年農林業センサス



大津市農業の課題③



●後継者の育成

大津市の農業人口は年々減少傾向にあり、また高齢化が進んでいます。このため、次世代の大津市の農業を担う人材の確保が必要となっています。

●兼業農家の強みを活かす

農家 1 戸あたりの経営規模が小さく、一足飛びに経営の大規模化を図ることはできません。しかし、兼業農家が多いことは一定の収入を確保したうえで新たな分野や作物に挑戦する足掛かりとして大津市の農業の強みとなる可能性があり、この強みを伸ばしていくことが必要です。

TPP(環太平洋パートナーシップ協定)やFTA(自由貿易協定)など、今後さらに国際的な農産物貿易の自由化が進み、海外産の安い農産物の輸入が増え、それにともない国内産の農産物の価格が安くなることが予想されています。

また、少子高齢化による人口減少社会の到来によって、国内の食料需要が全体として小さくなることも予想されています。

一方でライフスタイルの多様化により、消費者が食べ物に求めるニーズも変化を見せ、最近では地元産の安全かつ安心な食べ物に対するニーズが高まっています。

しかし少子高齢化による人口減少の影響もあって、大津市の農業の担い手は年々減少する傾向にあります。

さらに近年の地球温暖化などの気候の変動により気温の上昇などの環境の変化が起き、農産物の生産量が減少したり、品質が低下するなどの影響が出ています。

農産物の価格が安くなることは、消費者にとってはプラスですが、国内の産地間の競争もいっそう激しくなることが予想されます。生産者にとっては、さらなるコストダウンが求められるほか、農商工連携や6次産業化などによる農産物の差別化や新しい市場の開拓、地産地消型の販売強化、担い手の確保、気候変動への適応などに、これまでにない視点の取り組みが必要です。

加えて農業は食料を生産するだけでなく、美しい田園風景などのすばらしい自然景観をわたしたちにもたらし、暮らしをより豊かにしてくれます。わたしたちがよりこころ豊かに暮らすためには、農業の存在を今一度見直し、生産者を周囲が支える仕組みづくりが必要です。

当初策定(平成28年度)以降の社会情勢の変化 (農業を取り巻く情勢の変化)

大津市では、県下最大の消費地であるという強みを活かし、生産者を周囲が支える仕組みを作っていくため、平成29年(2017)3月に「大津市農業振興ビジョン」を策定して、様々な取り組みを行ってきました。

しかし、当初策定以降の社会情勢は変化しており、代表するものとして以下の5つが挙げられます。

- ①都市農業………宅地化すべきものとされていた都市農地が都市にあるべきものへと方向転換がなされたことにより、都市農地の持つ多面的機能の発揮が期待される など
- ②棚田振興………棚田の保全を核とした地域振興を促進することにより、棚田地域の有する多面的機能の発揮が期待される など
- ③農福連携………障害者などが農業分野に参画することにより、障害者などの就労や生きがいづくりだけでなく、新たな担い手の確保が期待される など
- ④スマート農業の普及・発展……ICTやAI、IoTなどの先端技術を活用した省力化や生産物の品質向上により、担い手減少への効果が期待される など
- ⑤農泊や農業生活体験などの取り組み……農村地域の人々と消費者や旅行者などとの交流を盛んにし、農業に対する理解を進めることにより、農業に関わる市民を増やす効果が期待される など

将来にわたって持続可能な大津市の農業の実現を目指すためには、関係機関などと連携し、これらの変化へ対応することが必要です。

さらに、生産地と消費地が近いという強みを活かし、大津市の農業と関わる「人」のすそ野を拡大し、「経済」活動としての農業の競争力を高める取り組みが必要です。

コラム 一昔前の大津の農村風景

大津市苗鹿で見られる
牛での代掻き作業(1958年)



写真提供:前野隆資(滋賀県立琵琶湖博物館所蔵)

写真は約60年前の大津市で見られた農業の風景です。今では当たり前になったトラクターなどの農業機械にかわって、牛が大いに活躍していました。当時は牛を用いた農業が盛んで、特に仰木地区では「一戸に牛一頭」といわれるほど、どこの家でも牛を飼っていました。家の中に牛小屋があって、人と牛が家族のように暮らしていたのです。

この牛たちが活躍するのは、田畑の上だけではなく、牛たちの糞尿は肥(こやし)として、栄養豊富な肥料として田畑にまかれていました。当時、肥料となる牛の糞尿は農家にとって重要なものでした。市街地から肥を詰めたたくさんの桶が琵琶湖の上を船で運ばれ、近郊農村の農家はその桶の肥を田畑にまく。そんな風景がすこしばかり昔の大津では当たり前だったのです。